

特定外来生物等の選定作業が必要と考えられる外来生物の概要(案)

分類	科	属	特定外来生物	原産地	評価の理由及び流通・利用状況	未判定外来生物	種類名証明書添付
爬虫類	イシガメ科	イシガメ属	・ハナガメ <i>Mauremys sinensis</i> ・ハナガメ×ニホンイシガメ <i>M. sinensis</i> × <i>Mauremys japonica</i> ・ハナガメ×ミナミイシガメ <i>M. sinensis</i> × <i>Mauremys mutica</i> ・ハナガメ×クサガメ <i>M. sinensis</i> × <i>Mauremys reevesii</i>	台湾、中国南部、ベトナム北部	【評価の理由】 ・日本各地で逸走個体が確認。野外越冬も可能で、定着可能。 ・幼体が輸入され安価で販売されているが、寿命が長く(数十年)、比較的大型になり、個人での終生飼育は相当に困難。 ・ニホンイシガメ等との交雑事例が知られており、イシガメ科の日本在来種と交雑するおそれ。 【流通・利用状況】 ・中華人民共和国や台湾で盛んに養殖されており、日本を含む各国に幼体が輸出されている。日本では主に幼体がペット用に販売されている。アカミミガメやクサガメほどではないが、流通量は多いと推測される。	-	・イシガメ属全種 ・ハナガメとイシガメ科に属する種間の交雑により生じた生物
	アガマ科	キノボリカゲ属	スウィンホーキノボリカゲ <i>Japalura swinhonis</i>	台湾の標高1,500m以下のほぼ全域。周辺島嶼(小琉球、緑島、蘭嶼)を含む。	【評価の理由】 ・日本でも既に定着し、繁殖しており、今後高密度化または分布拡大のおそれ。 ・分布拡大した場合、在来の生態系に被害を及ぼすおそれがあることから、早期の排除が必要。 【流通・利用状況】 ・ペットとして少数が日本に輸入され、流通している。動物園等で展示されている事例は見当たらない。	-	スウィンホーキノボリカゲ
両生類	ユビナガガエル科	コヤスガエル属	ジョンストンコヤスガエル <i>Eleutherodactylus johnstonei</i>	小アンティル諸島	【評価の理由】 ・海外の各地で定着して捕食や競合により生態系への被害が発生。 ・日本に侵入すれば、定着して在来の生態系に被害を及ぼすおそれ。 【流通・利用状況】 ・輸入販売の例は知られていない。国内のペット利用は、ほぼ無いと考えられる。	-	コヤスガエル属の全種
			オンシツガエル <i>Eleutherodactylus planirostris</i>	バハマ諸島、キューバ、ケイマン諸島	【評価の理由】 ・フロリダ半島に広く定着し、捕食や競合により生態系への被害が発生。 ・日本に侵入すれば、定着して在来の生態系に被害を及ぼすおそれ。 【流通・利用状況】 ・輸入販売の例は知られていない。国内のペット利用は、ほぼ無いと考えられる。	-	コヤスガエル属の全種
	ジムグリガエル科	ジムグリガエル属	アジアジムグリガエル <i>Kaloula pulchra</i>	中国南部からアジア熱帯域(インドシナ半島とマレー半島を中心とした東南アジア、南アジアの一部)に広く分布する。ボルネオ、スラウェシ、シンガポールのは外来種とする意見がある。	【評価の理由】 ・台湾では外来種として定着するなど、関東以西の温暖な地域に放された際には定着可能と想定。 ・日本では、観葉植物などに混入して空港で発見される事例が相次いでいる。 ・定着すれば在来の生態系に被害を及ぼすおそれ。 【流通・利用状況】 ・ペットとして利用され、野外採集個体が各国に輸出されている。日本でも一定程度流通している。	-	アジアジムグリガエル

(続く)

分類	科	属	特定外来生物	原産地	評価の理由及び流通・利用状況	未判定外来生物	種類名証明書添付
両生類 (続き)	ヒキガエル科	ヒキガエル属	<u>ヘリグロヒキガエル</u> <i>Bufo melanostictus</i>	中国南部、台湾からアジア熱帯域(東南アジア、南アジア)に広く分布する。バリ島の集団を外来と見なす意見もある。	<p>【評価の理由】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本に放された際には、沖縄をはじめとする南西諸島、小笠原諸島などに定着するおそれ。 ・輸入物資等への混入事例のもっとも多い両生類であり、観葉植物などに混入して日本の空港で発見される事例が相次いでいる。 ・仮に定着すれば高密度化して、在来の生態系に被害を及ぼすおそれ。 <p>【流通・利用状況】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・かつてはペットとして日本に輸入されていたが、未判定外来生物に指定され、輸入・流通は停止している。 	ヒキガエル属の全種 ただし、次のものを除く。 ・プレーンズヒキガエル ・キンイロヒキガエル ・オオヒキガエル ・アカボシヒキガエル ・オークヒキガエル ・テキサスヒキガエル ・コノハヒキガエル ・ヘリグロヒキガエル ・ニホンヒキガエル (<i>B. japonicus</i>) ・ミヤコヒキガエル (<i>B. gargarizans miyakonis</i>) ・ナガレヒキガエル (<i>B. torrenticola</i>) ・テキサスミドリヒキガエル (<i>B. debilis</i>) ・ロココヒキガエル (<i>B. paracnemis</i>) ・ナンプヒキガエル (<i>B. terrestris</i>) ・ガルフコーストヒキガエル (<i>B. valliceps</i>) ・ヨーロッパミドリヒキガエル (<i>B. viridis</i>)	ヒキガエル属の全種
魚類	イクタルルス科	アメイウルス属	<u>ブラウンプルヘッド</u> <i>Ameiurus nebulosus</i>	北米大陸東部	<p>【評価の理由】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・海外では在来種の地域的な絶滅を引き起こしている。 ・低水温に耐性があり、卵や仔魚の保護を行うため在来種よりも優位に増殖する可能性。 ・特定外来生物のチャネルキャットフィッシュと類似の生態で、定着して捕食や競合により、在来の生態系に大きな被害を及ぼすおそれ。 <p>【流通・利用状況】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・輸入はされておらず、国内での本種の利用はほぼ無いと考えられる。海外ではゲームフィッシングや食用として利用されている。 	<i>Ameiurus</i> 属の全種 ただし、次のものを除く。 ・ブラウンプルヘッド	<i>Ameiurus</i> 属の全種
(続く)		ピロディクティス属	<u>フラットヘッドキャットフィッシュ</u> <i>Pylodictis olivaris</i>	メキシコからカナダ南部にかけての北米大陸東部及び中部	<p>【評価の理由】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・海外では絶滅危惧種を含む在来種の減少を引き起こしている。 ・アメリカ合衆国の中にも非分布域があり、国内由来の外来種として最も悪影響が大きい種の一つと言われている。 ・低水温に耐性があり、卵の保護を行うため在来種よりも優位に増殖する可能性。 ・チャネルキャットフィッシュと類似の生態で、定着して捕食や競合により、在来の生態系に大きな被害を及ぼすおそれ。 <p>【流通・利用状況】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国内ではごく少数が観賞魚として販売されている。海外ではゲームフィッシング用に利用されている。 	-	<u>フラットヘッドキャットフィッシュ</u>

分類	科	属	特定外来生物	原産地	評価の理由及び流通・利用状況	未判定外来生物	種類名証明書添付
魚類 (続く)	モロネ科 (狭義)	モロネ属	ホワイトパーチ <i>Morone americana</i>	アメリカ北東部からカナダ南東部の沿岸地域	【評価の理由】 ・海外では在来種と置き換わったほか、肉食性魚類の成長率が低下。 ・海外では漁業対象種を減少させ、地域の漁業に大きな被害が発生。 ・低水温に耐性があり、卵や仔魚の保護を行うため在来種よりも優位に増殖する可能性。 ・ストライプトバスなどと類似の生態で、定着して捕食や競合により在来の生態系に大きな被害を及ぼすおそれ。 【流通・利用状況】 ・輸入はされておらず、国内での本種の利用はほぼ無いと考えられる。海外ではゲームフィッシングや食用として利用されている。	モロネ科の全種 ただし、次のものを除く。 ・ストライプトバス ・ホワイトバス ・ホワイトパーチ	モロネ科の全種
	パーチ科	ギムノセファルス属	ラッフ <i>Gymnocephalus cernuus</i>	イギリスからロシア、中国までのユーラシア大陸	【評価の理由】 ・海外では在来種の地域的な絶滅を引き起こしている。 ・低水温に耐性があり、国内に定着できる可能性。 ・環境悪化や環境変化に耐性があり、繁殖能力も高いため、定着すれば短期間で増殖し、在来の生態系に被害を及ぼすおそれ。 【流通・利用状況】 ・国内での本種の利用はほぼ無いと考えられる。海外ではゲームフィッシング用の餌として利用。	<i>Gymnocephalus</i> 属の全種 ただし、次のものを除く。 ・ラッフ	<i>Gymnocephalus</i> 属の全種
	ハゼ科	ネオゴビウス属	ラウンドゴビー <i>Neogobius melanostomus</i>	アゾフ海、黒海、カスピ海流域	【評価の理由】 ・海外では競合や捕食によって在来の生態系への被害が発生。 ・低水温に耐性があり、国内に定着できる可能性。 ・汽水域まで生息可能、海を通じて分布拡大する可能性があり、定着して捕食や競合により、生態系に大きな被害を及ぼすおそれ。 【流通・利用状況】 ・国内での利用はほぼ無いと考えられる。海外ではゲームフィッシング用の餌として利用。	-	<i>Neogobius</i> 属の全種
	ナマズ科	ナマズ属	ヨーロッパナマズ <i>Silurus glanis</i>	中央・東ヨーロッパ	【評価の理由】 ・海外では捕食によって在来種の地域的な絶滅を引き起こし、在来の生態系への被害が発生。 ・低水温に耐性があり、国内に広く定着できる可能性。 ・汽水域まで生息可能で、海を通じて分布拡大する可能性。 ・世界最大の淡水魚で、どう猛な捕食者であるため、国内に定着した場合、生態系に大きな被害を及ぼすおそれ。 【流通・利用状況】 ・観賞魚として利用されており、アルビノ個体も作られている。	-	ナマズ属の全種
	パイク科	パイク科全属	・パイク科 <i>Esocidae</i> spp. ・パイク科に属する種間の交雑により生じた生物	北米大陸のアメリカ北東部からカナダ南東部(レッドフィンパイク、グラスパイク、チェインパイク)及びヨーロッパ東部(アキタニアンパイク、 <i>E. cisalpinus</i>)、ロシア、モンゴル、中国の太平洋岸(アムールパイク)	【評価の理由】 ・海外では競合や捕食によって在来の生態系に被害を及ぼしている種がある。 ・低水温に耐性がある場合が多く、国内に定着できる可能性。 ・特定外来生物のノーザンパイクなどと類似の生態で、定着して在来の生態系に被害を及ぼすおそれ。 【流通・利用状況】 ・かつては観賞魚として流通していた種もある。	-	・パイク科の全種 ・パイク科に属する種間の交雑により生じた生物

分類	科	属	特定外来生物	原産地	評価の理由及び流通・利用状況	未判定外来生物	種類名証明書添付
魚類 (続き)	カダヤシ科	ガンブスィア属 (カダヤシ属)	ガンブスィア・ホルブローキ <i>Gambusia holbrooki</i>	アメリカ東部の沿岸地域	【評価の理由】 ・海外では絶滅危惧種を含めた在来種の減少を引き起こすなどして生態系への被害が発生。 ・低水温に耐性があり、仔魚の状態です子を産むため在来種よりも優位に増殖する可能性あり。 ・国内外の広い範囲で被害を及ぼしている特定外来生物のカダヤシと類似の生態で、捕食や競合により在来種を駆逐するなどして生態系に大きな被害を及ぼすおそれ。 【流通・利用状況】 ・国内で繁殖させた個体が観賞魚としてごく少数流通している。	-	カダヤシ及び <i>G. holbrooki</i>
	アカメ科	アカメ属	ナイルパーチ <i>Lates niloticus</i>	西アフリカからナイル川流域	【評価の理由】 ・海外で在来の生態系に被害を及ぼしており、特にビクトリア湖では競合と捕食によって固有のカワスズメ属魚類を200種も絶滅させた。 ・南西諸島で定着する可能性が高い。 ・大型化し、捕食によって在来の生態系に大きな被害を及ぼすおそれ。 【流通・利用状況】 ・観賞魚として流通している。	-	アカメ科の全種
	コイ科	タナゴ属	オオタナゴ <i>Acheilognathus macropterus</i>	中国、朝鮮半島、アムール川	【評価の理由】 ・国内の一部地域で在来タナゴと置き換わるなどの被害が発生。 ・分布拡大によって、国内に生息する絶滅危惧種のタナゴへの生態的、遺伝的な攪乱が起こる可能性。 【流通・利用状況】 ・観賞魚として比較的多く流通している。釣りの対象ともなる。	-	タナゴ属の全種
	ギギ科	ギバチ属	コウライギギ <i>Tachysurus fulvidraco</i>	東アジア(アムール川から韓国、中国南部)	【評価の理由】 ・霞ヶ浦を含む利根川水系で定着・分布拡大している。 ・チャネルキャットフィッシュと生態が類似していることから、在来の生態系に被害を及ぼすおそれ。 ・分布拡大によって絶滅危惧種や固有種のギギ科魚類の遺伝的な攪乱が起こる可能性。 ・鰭に棘を持つため、漁業被害を及ぼす可能性。 【流通・利用状況】 ・日本での利用に関する情報は得られていない。	-	ギバチ属の全種
	ガー科	ガー科全属	・ガー科 <i>Lepisosteidae spp.</i> ・ガー科に属する種間の交雑により生じた生物 平成30年2月に指定	北米大陸のカナダケベック州からコスタリカ	【評価の理由】 ・日本各地で遺棄されたと思われる個体が確認。野外での越冬も可能で、定着可能と想定。 ・数十年にも及ぶ寿命を持ち、全長1~2mと大型になる。 ・肉食性で大型化するため、捕食によって在来の生態系に被害を及ぼすおそれ。 【流通・利用状況】 ・観賞魚として、一部の種は幼魚が安価で販売され、流通量は多いと推測される。	-	・ガー科の全種 ・ガー科に属する種間の交雑により生じた生物

分類	科	属	特定外来生物	原産地	評価の理由及び流通・利用状況	未判定外来生物	種類名証明書添付
植物	イネ科	オオハマガヤ属	<u>ビーチグラス</u> <i>Ammophila arenaria</i>	ヨーロッパの海岸地域	<p>【評価の理由】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本に未侵入だが、海外では侵略的な外来種で、日本に導入された場合、海岸砂丘に生育する在来植物と競合し、駆逐するおそれ。 ・海水で分布を拡大すること等から、海岸域の生態系を改変し、海岸砂丘等に生息する在来動物の生息環境に影響。 <p>【流通・利用状況】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・海外では砂丘の砂止めに植栽。日本での流通に関する情報は得られていない。 	-	<u>オオハマガヤ属全種</u> (昆虫のジガハチ属と同学名なので、混同しないよう注意が必要)
	キク科	ツルギク属	<u>ツルヒヨドリ</u> <i>Mikania micrantha</i>	北アメリカと南アメリカの熱帯地域	<p>【評価の理由】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・つるで絡みついて厚い藪を形成しながら林冠を覆うよう繁茂。 ・海外で侵略的で、小笠原諸島や南西諸島の固有の在来植物と競合し、駆逐するおそれ。 ・今後の分布拡大により在来の生態系に大きな被害を及ぼすおそれ。 <p>【流通・利用状況】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・近縁種は観葉植物として流通されるが、本種の利用に関する情報は得られていない。 	-	<u>ツルギク属全種</u>
	モウセンゴケ科	モウセンゴケ属	<u>ナガエモウセンゴケ</u> <i>Drosera intermedia</i>	北アメリカ北部および東部・イギリスを含むヨーロッパ全域	<p>【評価の理由】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・湿地の絶滅危惧種と競合、駆逐し、絶滅危惧種を含む在来種の遺伝的攪乱を起こす可能性。 ・在来の生態系に大きな被害を及ぼすおそれ。 ・意図的に植えられたものが問題であり、早期の排除、拡散防止が必要。 <p>【流通・利用状況】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「食虫植物」として観賞用に、おもに愛好家の間で流通。一部の湿地で意図的に植栽されている。 	-	<u>モウセンゴケ属全種</u>
	タヌキモ科	タヌキモ属	<u>エフクレタヌキモ</u> <i>Utricularia inflata</i>	北アメリカ東部	<p>【評価の理由】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ため池や湿地の希少な水生植物と競合し、駆逐するおそれ。 ・外来のタヌキモ類の中で、特に生態系への影響が深刻。 ・水面だけでなく水底近くにまで繁茂し、水生の生物相への影響が大きく、防除が困難。 ・分布が拡大した場合、在来の生態系に大きな被害を及ぼすおそれ。 <p>【流通・利用状況】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「食虫植物」として観賞用に、おもに愛好家の間で流通。 	-	<u>タヌキモ属全種</u>

※下線部分:新規に指定することが考えられるもの